J-CLIL 記事の執筆例

―あくまでも目安としてご覧ください―

日本 太郎（日本教育大学）

１．はじめに

近年、英語教育では、文法や語彙の習得だけでなく、英語を用いて思考し、他者と協働しながら学ぶ力の育成が求められている。その実現に向けた指導法の一つとして、内容と言語を統合的に学ぶ CLIL（Content and Language Integrated Learning）が注目されている（日本, 2000）。本実践では、中学校第１学年の英語授業に CLIL の考え方を取り入れ、「世界の食文化」を題材とした活動を行った。本稿では、その実践内容と成果について報告する。

２． 実践の背景およびねらい

本校の中学校第１学年では、英語によるコミュニケーション活動を積極的に取り入れている。しかし、生徒の多くは英語で自分の考えを述べることに苦手意識を持っており、単語や短い文のみで終わってしまう場面が多く見られた。

そこで、本実践では「世界の食文化」をテーマに、生徒が英語を「学ぶ対象」ではなく「学ぶための道具」として活用することを目指した。身近な食文化を比較しながら異文化理解を深めるとともに、自分の考えを英語で伝える力の育成をねらいとした。

３．指導計画および指導課程

表１に示すように、本授業は全４時間にわたり実施した。

表１　指導計画

時	学習内容	主な活動
第１時	世界の食文化を知る	写真や動画を見ながら食文化について考える
第２時	英文を読む	世界各国の料理についての英文を読む
第３時	比較する	日本と海外の食文化の違いをグループで話し合う
第４時	発表する	おすすめの料理や文化について英語で紹介する

授業では、写真やイラストを多く活用し、生徒が内容を理解しやすいように工夫した。また、教師は必要に応じて英語と日本語を使い分け、内容理解を支援した。

生徒はグループ活動を通して情報を整理し、“I think... ” “In my opinion...” “I want to try... because...” などの表現を用いて、自分の考えを発表した。

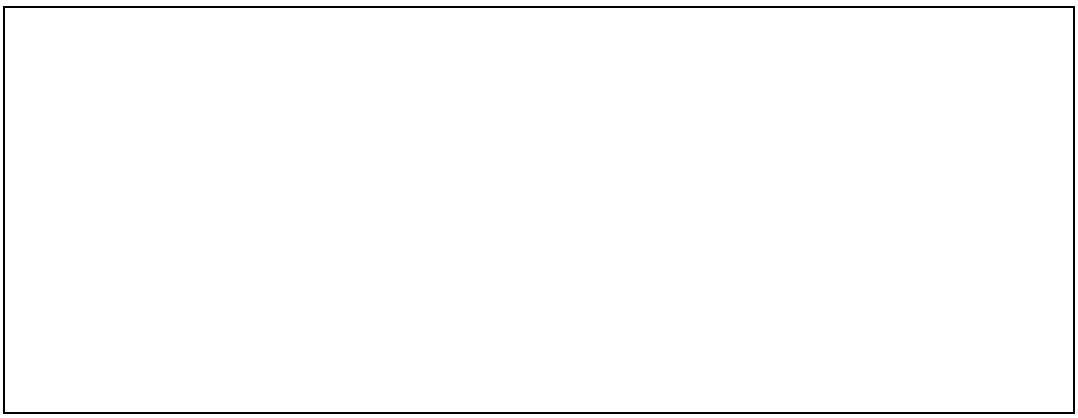


図１　全体の流れ

４．学習者の反応・成果

活動を通して、多くの生徒が積極的に英語を使おうとする姿が見られた。特に、食文化という身近なテーマであったことから、自分の経験と関連付けながら発言する生徒が増加した。

また、グループ活動では、お互いに英語を助け合いながら表現を考える様子も見られた。

授業後の振り返りでは、「英語を使うことが楽しかった」「外国の文化をもっと知りたい」といった感想が多く寄せられ、内容学習への興味・関心も高まったことがうかがえた。

５．分析・考察

CLIL では、内容・コミュニケーション・認知・文化（4Cs）の統合が重視される。本実践では、「食文化」という教科横断的なテーマを扱うことで、生徒は単なる英文読解にとどまらず、比較・分類・理由付けといった思考活動を行うことができた。

また、英語を使う目的が明確であったため、「正しく話すこと」よりも「伝えること」を重視したコミュニケーションが促進された。教師が適切な言語支援（Language Support）を行うことで、生徒は安心して発話することができ、英語使用量の増加にもつながった。

一方で、英語力に個人差があるため、難易度の異なる教材や支援方法を準備する必要性も明らかとなった。

６．教育的示唆

CLIL は、英語力だけでなく、思考力や異文化理解、協働的な学習態度を育成する上でも有効な指導法であると考えられる。特に、日本（2005）が指摘したように、中学校段階では、生徒の興味・関心を引き出せるテーマを設定することが重要であり、内容と言語のバランスを意識した授業設計が求められる。

また、生徒の英語力に応じたスキャフォールディングを充実させることで、より多くの生徒が主体的に学習へ参加できると考えられる。

７．おわりに

本実践では、CLIL を取り入れた授業を通して、生徒が英語を活用しながら主体的に学ぶ

姿が見られた。英語を「学ぶ」だけではなく、「英語で学ぶ」経験を積むことで、学習意欲やコミュニケーション能力の向上につながることが示唆された。

今後は、他教科との連携や探究的な学習活動も取り入れながら、CLIL の実践をさらに発展させていきたい。

引用文献（参考文献）

（APA 第 7 版を参考とすること）

引用作法について

⑴ 間接引用の場合

例）CLIL には教育的価値があるとされており（日本, 2000）、～

例）日本（2000）は CLIL には教育的価値があると述べ、～

⑵ 直接引用の場合：ページ番号も記す。

例）日本（2002）は、「CLIL の教育的価値は計り知れない」（p. 56）と述べた。

※複数頁にまたがる場合は pp. 56-57 のように記す。

※その他の引用方法については、APA7th を参考にする。